

氏名	中瀬 雄三
学位の種類	博士（コーチング学）
学位記番号	博乙第 2853 号
学位授与年月	平成 30年 2月 28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	バスケットボールプレイヤーの状況を読み解く身体知

主査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	佐野 淳
副査	筑波大学教授	博士（学術）	山田幸雄
副査	筑波大学助教	博士（体育科学）	木越清信
副査	筑波大学教授	博士（体育科学）	内山治樹

### 論文の内容の要旨

中瀬雄三氏の博士学位論文は、バスケットボールプレイヤーのゲーム状況を読み解く身体知を解明したものである。その要旨は以下のとおりである。

#### （研究目的）

本論の目的は、バスケットボールにおける練習方法や指導方法の考案、選手や指導者の育成プログラム作成に寄与することを意図して、バスケットボールのプレイヤー（選手）がゲーム状況を総体的にとらえることのできる能力、すなわち、状況を読み解くことのできるバスケットボールプレイヤーの身体知を発生運動学的立場から解明することである。これまでの研究では、ゲーム状況を察知する能力は「状況判断能力」として主に心理学的研究の対象とされることが多かったが、本研究の問題意識と着眼点の特徴は、この状況を察知する能力を身体知として取り上げ、それを現象学を基底に据えている発生運動学（スポーツ運動学）の立場から究明しようとしているところにある。

#### （論文の構成）

本論は、研究の問題意識や研究目的、本研究の特色が書かれている緒論、および、コーチング現場への示唆の内容を含めた総括を除いて、4つの章から構成されている。第1章から第4章において展開されている内容は、以下の通りである。

第1章では、著者はバスケットボールのゲームそのもの及び実際のプレーヤーについて考察し、ゲームの状況を意味的視点から考察して、「構造」と「場面」に分類した。本論で言うゲーム状況の「構造」とは、おもに選手のコート内の位置や選手同士の位置関係であり、従来の研究ではこの「構造」に関するものが多かった。しかし、本論で著者は、このゲーム状況をその「構造」だけではなく、「場面」という側面から取り上げている。著者が言う「場面」とは、時間、点差、ファール数、ゲームの流れ等々に関するものであり、こうした観点からのゲーム形成に関する研究はこれまで少なかった。本研究は、そうしたゲーム状況（構造、場面）を選手の「身体知としての能力」がどのように取り上げているのかを解明しようとした研究である。

第2章では、バスケットボールプレーヤーが状況を読み解く身体知を研究していく際の研究の立場およびその研究方法が説明されている。本研究において著者がとっている学問の立場は発生運動学あるいは現象学的運動学としてのスポーツ運動学であり、本研究で著者はその中でも身体知の解明に向けた現象学的解明を目指している。身体知研究のこのような現象学的解明の意義は、自然科学的な研究では明らかにできない選手の意識や感覚内容を、数量に置き換えずに「感覚質」のまま分析・解明するところにある。このような身体知研究では、自分の意識体験を反省し、誰にでも共通する、一般的で本質的な内容（反省的エヴィデンス）をもとに論証しようとするものである。なお、本研究で著者は現象学の方法である本質看取という方法を基盤にしながらも、考察過程において必要となる事例を集めたり、考察過程を明確に示すことを目的として、質的研究の方法も一部採用している。このようなスポーツ運動学的あるいは現象学的方法は、選手の技術力や戦術力を高めるために不可欠なコーチング現場に寄与し得る有用な実践内容を解明・提供できるものである。

第3章では、著者はバスケットボールのゲーム状況の「構造を読み解く身体知」を分析している。ここではオリンピック男子バスケットボールのゲームにおけるプレー事例に焦点が当てられ、選手の戦術行為が印象分析されて、選手の状況の「構造」を読み解く身体知の3つ要素が抽出されている。それは、「対応方法が身体化されていること」であり、また「バスケットボールの原理が体得されていること」、そして「相手や味方の動感を読み解けること」である。バスケットボールのプレーを成立させる上では非常に多くの能力（身体知）が機能しなければならないのは言うまでもないが、これら3つの要素はその中でも本質的な位置を占めていることが強調されている。

第4章では、著者はバスケットボールのゲーム状況の「場面を読み解く身体知」を分析している。ここでは場面の重要な要素であるゲームの「流れ」の構造が考察され、「流れ」の性質として、継続性（一度チームに発生すると形成が逆転しづらい性質）と強制性（特別な措置をとらない限り流れが発生しているチームが優位にゲームが展開される）の2つの要素が導き出された。また、これら2つの性質を有する「流れ」は、「選手の感情」が直接的な発生要因となっており、「試合に関する事象」と「選手の価値観」の2つの要素とも互いに影響し合う構造になっていることが明らかにされている。そして、この「流れ」の構造に関する考察から、「場面」を読み解く身体知を構成する3つの要素が明らかにされている。一つ目は、オフェンスのプレーを変化させたり、選手の感情にアプローチすることで流れを発生させること、すなわち「流れに対するアプローチが実践できること」であり、二つ目は「流れの“起点”を把握できること」である。この場合、流れの起点とは、どちらかのチームに流れが発生する予兆を示すものであり、試合の結果を決定づけるような重要な時間帯あるいは瞬間である。三つ目は「過去と未来をとらえたプレーができること」であり、これはピックプレーやパスを用いて相手デフェンスの対

応のし方を情報収集したり、実践可能性の低いパスであっても、相手ディフェンスに対して身体的・精神的負荷をかける意図をもって実現されていることである。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本博士論文は、バスケットボールにおける選手がゲームの状況を読み解く際の身体知に焦点を当ててそれを発生運動学の立場から解明しようとした研究であり、バスケットボール選手のプレーを可能にする上で、従来にない身体知という視点でプレー能力の解明を目指そうとした点は独創的である。また、研究の立場である発生運動学という学問をバスケットボール（球技）に適用させ、この学問の有効性を広めたことは高く評価できる。今後、練習と試合という実践現場で選手の身体能力をどのように発達させることができるかの方法論の開拓、および、発生運動学的視座に立つバスケットボールの研究の深まりが期待される。

平成 29 年 12 月 21 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。